まぼろし

幻の季節

眉村 卓

幻（まぼろし）の季節風土

眉村　卓

主婦の友社

〈検印省略〉

幻の季節

昭和五十六年五月二十日　第一刷発行

定　価　八八〇円
著　者　眉村　卓
発行者　石川晴彦
発行所　株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台一―六
電話／二九四―一一一一（大代表）
郵便番号／一〇一
振替／東京二―一八〇番
印刷所　共同印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

©Taku Mayumura 1981 Printed in Japan 0095-913491-3062

幻の季節・眉村 卓

目次

ホテルたかのは——5
浄瑠璃寺・夏——27
黒いドアの店——49
ダムで会った女——71
浜詰海岸（はまつめ）——93
遠い日の町——115
乗せられた旅——137
旅で得たもの——159
照りかげりの旅——177

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

装丁／小池冨夫
版画／森　正夫

ホテルたかのは

1

新幹線の中でもう一度小説の筋を練ってみよう。それが駄目ならせめてひと眠りして元気を取り戻しておこう。

そう考えていたのだったが、結局はどっちつかずになってしまった。ストーリイは立たず、眠るにもいらいらして眠れず……塚原耕助は、疲れた足をひきずって国電に乗りかえた。

もう日暮れなのだ。

塚原は次の神田で降り、駅の近くの雑誌社に向った。

駅の近くといっても、東京に不馴れな塚原はいつも道に迷ってしまう。今度もまたそうであった。着替えや辞書類の入ったカバンと原稿用紙の包みを両手に持ち、下着が汗で濡れるのを意識しながら歩き回っていると、彼はやはりみじめな気分になるのを抑えることが出来なかった。

こんな目をして……これから東京都内のどこかのホテルに罐詰になって、原稿を書かなければならないのである。いくら必死になっても話がうまくまとまらず、とうとう締切も過ぎてしまったのだから、自業自得には違いないが……あわれなことに変りはないのだ。

彼はふと、作家になる前、ずっと前に何度か東京に来たときのことを思い出した。

あのころは、東京に行くというのがまさしく旅であった。夜行列車に乗り、夜が明けはじめる時分には東京が近くなっている。さあ東京だ東京だという期待に、妙に胸がおどったものである。

そう。あのころは自分も若く……何もかもが可能性に満ちていたのだ。
今は……。
いや、考えるのはよそう。
これから仕事なのだ。
何日間にもわたる……原稿を書きあげなければ解放されない仕事が待っているのだ。
そんな想念を追っているうちに、頭ではなく足が道順をおぼえていたのであろう。彼はいつの間にか目的の雑誌社の前に来ているのに気がついた。
大阪の自宅を出る前に電話で約束した通り、編集者のFは待っていた。待ち構えていたというべきかも知れない。いつもよりもさらに目つきを鋭くしていたFは彼の疲れなどにはいっさい頓着せず、そのまま彼をともなっておもてに出、タクシーをつかまえた。

車は、すっかり夜になった東京の街を何度か方向を変えて走った。大阪に住む塚原はいつも思うのだが、東京は坂が多い。それが彼にとっては東京情趣といったものをおぼえさせるのだが……そんな坂のひとつを、車は登っていた。
Fがタクシーの運転手に告げた行く先は赤坂近辺ということだったが、窓から見える店々の電飾看板から察すると、どうやらそのあたりに来ているらしい。
「急なことで、いつもうちが使うホテルが取れなかったものですからね」
Fは、それが癖の、ぶっきら棒な調子でいった。「そんなわけで、今回仕事をして頂くのは、ぼくも

知らないホテルなんですよ。枚数が多いからとりあえず予約は今夜を含めて四泊取りましたが……出来ることなら一日でも早く仕上げて欲しいですな。こっちもかなり苦しいんだから」

「――はあ」

彼は従順に応じた。デビュー以来ずっと世話になっているFに対し、しかも今度のようにその号の柱となるはずの原稿が遅れて罐詰にならざるを得ない状態では、何をいわれても仕様がないのであった。

「このへんだな。あ。あれだろう。そこで停めて下さい」

Fの指示で、タクシーは坂の中程にある小ぢんまりしたビルの前で停止した。

ふたりは車を降りる。

はなやかさを強いて抑えた感じの町並にまじって、同様におとなしく構えたそのビルは、小さな玄関に淡い光で、〝ホテルたかのは〟という文字を浮かべていた。

「たかのは、とは、鷹の羽根でしょうかね」

塚原はそんなことをいってみたが、Fは、

「さあ。そうでしょうな」

と、答えたきりで、さっさと中に入って行く。

塚原もつづいた。

フロントとの話し合いが終ると、Fはそこで別れを告げた。これからまた社に戻って、仕事をしなければならないのだという。

彼はボーイに案内されて、エレベーターに乗った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

部屋は、何ということもないただのシングルルームだった。ただ、テーブルは多少広くて、照明も手くらがりにならないような位置にあるのが有難い。
彼は荷物の整理を済ませると、原稿用紙をデスクに置き、椅子に腰をおろした。

2

そろそろ午後十時だ。
塚原はテレビのスイッチを切ると溜息をつき、ベッドに仰向けになった。
仕事は皆目はかどっていない。
原稿はいまだに白紙だった。
正確にいえば、彼の頭の中ではある程度まで進んではいる。あと一歩、物語の中で重要な役割を果たす女が、どうももうひとつ、具体的なイメージとなって浮かんで来ないのであった。それがまとまりさえすれば、直ちに筆をおろせるのだが……そこでひっかかってしまっている。そして、原稿用紙の枡目を埋めない限り、実際にはちっとも進行していないのと同じであった。
これが他の作家であったなら、それはそれであとで考えるとして、ともかく書きはじめるかも知れない。そういう作家はたくさんいる。が……彼はプロットが完全に固まるまではスタートしない主義であった。
女なのだ。

どういう感じの女がふさわしいか……どんなイメージなら効果があがるか……つかめそうで、つかめない。

だから、テレビのドラマでも見ればヒントを得られるかと期待して、あれやこれやと何分かずつ見たりしたのだけれども……時間の浪費に過ぎなかった。

もう一歩……。

ひょいと頭の中に何かが出現すればいいのだ。

考えているうちにも、時間はどんどん経って行く。

それにつれて、彼には、ホテルのこの部屋が、しだいに檻のように思えて来た。事実、檻には違いない。彼が作品を書きあげるまでの檻なのだ。

すると、彼は、調子が悪いときはいつもそうであるように、部屋にいると窒息しそうな錯覚に襲われた。

部屋を出よう。

部屋を出て、気分を転換するのだ。転換したら、何かうまいヒントをつかめるかも知れない。

とはいうものの……彼は、ホテルの外に出て夜の盛り場をさまようほどの心の余裕は持っていなかった。ある程度の枚数をこなしたあとならともかく、今は書きだしてもいないのだ。そんな状況で外を飲み歩いていて、Fが電話でも掛けて来たりしたら、どうなることか知れたものではなかった。

今は、せいぜいホテルの中をぶらつく位で辛抱しなければなるまい。

待てよ。

そういえば、ホテルの案内書には、この七階にサパークラブがあるとしるしてあった。
そこへ行って、軽いものを食べ、ビールを一、二本飲むとしよう。
彼はそう決めると、急に気が楽になるのをおぼえながら、ネクタイを締め上衣をひっかけて、部屋のドアを引き開けた。
エレベーターで七階に来る。
出たところが、サパークラブの入口になっていた。黒を基調にしたみじかい通路には鈍く灯がともっていて、何となく秘密めかした雰囲気がある。
中からふたりの女が出て来たので、彼はそれをやりすごしてから、通路に入ろうとした。
と。
その女たちを追って、もうひとり女が来たのだ。
すれ違いざま、女は彼の顔を見て、はっとしたようだった。
彼も、どきりとした。
その女の顔。
だが……いやまさか。
彼が突っ立っているほんの僅かな間、女のほうも彼をみつめていた。
「……」
が……女は何かいおうとしてやめ、軽く会釈をして、去って行った。
彼はそれでもまだ一秒か二秒、その場にたたずんでいた。

あれは……。

あの顔は……唐沢れい子であった。昔、塚原たちが同人誌をやっていたときの仲間だった唐沢れい子なのだ。仲間うちでの女王でありシンボルであったころ、そのままなのである。あの時分は塚原もまたご多分に洩れず彼女に想いを寄せていたのだ。

だが。

今のがその彼女であるはずはない。あり得ないことであった。なぜなら唐沢れい子は七年か八年前、交通事故で死んだからである。自分でスポーツカーを運転していて、トラックと正面衝突したのだ。睡眠薬を飲んでいたとの話もあって、覚悟の自殺だという者もいた。

今の女は、その唐沢れい子がよみがえったかのように、そっくりであった。

もちろん、それは偶然であろう。世の中にはときとして、酷似している人間がいるものだからである。

しかし、彼には不思議だったのは、なぜその女が自分を見て驚き、去りぎわに会釈をしたかということである。彼は職業柄あちこちで講演もしサイン会にも出たことがあるから、多くの人と話をし、それを忘れている場合がすくなくない。先方だけが記憶しているということは珍しくないのだ。が……それが唐沢れい子そっくりな女であれば、彼は決して忘れたりはしなかったであろう。

なぜ……?

彼はぼんやりと考えながら、店内に入って行った。

店の内部はさらに暗かった。このホテルの規模にふさわしくあまり広くないホールには、そこかしこ

に、顔がやっと判別出来るかどうかという小型ランプを載せたテーブルが配置されている。それでいてどこか超現実的な感じがするのは、ダークライトで卓布が螢光を帯びて浮きあがっているからであった。

ホールの片側の、かたちばかりのステージでは、小編成のバンドがムード音楽を演奏している。

彼はとりあえずビールを頼み、テーブルに両肱をついて、今の女のことを考えた。

あの女に、どこで会ったのだろう？

会ったとすれば、どうしておぼえていないのだろう？

だが、それを深く考えようとしても、手がかりはなさそうであった。彼は諦め……それからやはり、唐沢れい子のことを回想しはじめていた。

一口では形容出来ない女だったな。

おだやかで優しく、思いやりがあるようでいて……ときに独断的な激情家の一面をも見せた。思慮深いのか突進型なのか、彼にはついに分からずじまいだったのである。また、それが彼女の魅力でもあったのだけれども……しかも、そうした二面性が何の不自然もなく融和していたために、彼には、全体としては何となく把握出来るという印象を受けてもいたのである。

……。

そこで、彼は顔をあげた。

唐沢れい子。

そうなのだ。

彼女の性格こそ、現在苦しんでいる小説にぴったりではないのか？　物語の中で必要な女の像がうまくつかめなかったのは、適当な類型を用いようとし……それでは無理が生じるからなのだった。ここで彼女をそのまま登場させれば、ぴったりおさまるのではあるまいか？　むしろ望外の効果を生じるのではあるまいか？

こうなってみると、なぜ彼女のことを想起しなかったのか、奇妙な気さえする。やはり……いつとはなしに、忘却していたのであろう。それがここで似た女に会ったのが幸運だった。

彼女のイメージを使うのだ。

そう思い立つと、もうじっとしていられなかった。彼は運ばれて来たビールを、店に失礼にならない程度に飲むと、席を立った。

3

ペンを置き、両手で顔を上下に何度もマッサージしてから、彼は腕を伸ばし、大きなあくびをした。身体はぐったりとなり、目も疲れている。

それも当然であろう。

ゆうべ、サパークラブから戻って書きはじめ、はずみがついて来たところでいったん中止して眠り、早朝からまたペンを走らせて来たのだ。途中、食事とか部屋の掃除とかで休みはしたものの、おおむねずっと書きつづけだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.